テキスト解釈の二類型——『生に対する歴史の利害』を手がかりとして

湯浅　弘

対象となるテキストを読み、そこから読み取られた事柄を思想史に関する既存の知識と突き合わせながら、言葉へと定着させていく。何らかの意味で思想史と呼びうる研究領域に関わる人間にとって、これはごく当たり前の作業であり、今更こと改めて問題にする必要もないかのように見える事柄ではある。が、具体的な対象についての研究を進める際には暗黙のうちに遂行されているその作業にひとたび反省の目を加えてみるならば、そこにはなお問われるべき問題が山積していると見ることが出来る。テキストから何が読み取られ得るのか。テキストの解釈は何を目指しているのか。あるいは又、テキストを解釈するとはそもそもどういうことなのか。素朴ではあるものの、それ故に一層根本的とも言えるこうした問いが、思想史研究の前提となるテキスト解釈という作業をめぐっては待ち構えているのである。

解釈という問題に関するこれら一連の問いは、古くは古代ギリシャの詩篇やキリスト教の聖書をはじめとする古典を解釈する際の規則の集成に起源を持ち、前世紀後半から今世紀前半にかけては精神科学の方法論として、また現存在分析の中核的実質として新たな展開を見せ、現代ではガーダマーやリクールなどに代表される解釈学の伝統の基底にある問いと見ることができる。また、それとは立場も系譜も異にするとはいえ、構造主義的な言語学や記号論の知見を背景として生成してきたテキスト理論もこれらの問いと無縁であるわけではない。というより、一層端的には、テキスト・意味・理解といったテキストの解釈に関わる一連の問題群は、解釈学やポスト構造主義は無論のことどのような潮流に属するものであれ、言語論的転回を果たしたと言われる現代哲学にとって無視し得ぬテーマになった、と言っても過言ではないと思われるのである。

このような問題状況を念頭に置きつつテキストの解釈という営みに若干の反省を加えてみようというのが、本稿での筆者の目論見である。初期ニーチェの著作『反時代的考察』の第二論文である『生に対する歴史の利害』という具体的なテキストを手がかりとして、又その解釈として想定しうる解釈の二類型の比較吟味を通してである。それ故、ここでの試みは『生に対する歴史の利害』を素材としたテキスト解釈のケーススタディと規定できる。

ところで、『生に対する歴史の利害』は、歴史的過去に関する解釈という限定付きではあるものの、それ自体の内に解釈に関す

るニーチェの見解を含んでもいる。また、ペルスペクティヴィスムス（遠近法主義）と呼ばれ、力への意志説とも密接に連関する後期ニーチェ哲学の基本思想は、解釈という術語を機軸として展開されていると見ることが出来る。そこでは「〈存在するのは事実だけだ〉として現象の所で立ち止まってしまう実証主義に対して私は言いたい。違う、まさにこの事実なるものこそ存在しないのであり、存在するのは解釈だけなのだ、と。[1]」と解釈の根源性が指摘され、「同一のテキストは無数の解釈を許す。〈正しい〉解釈は存在しない。[2]」と解釈の絶対的な多様性が主張されてもいるのである。

後期ニーチェのこのようにラディカルな解釈の哲学は、現代の解釈学、ポスト構造主義という、テキスト・意味・理解といった諸問題をめぐって相対峙する知的伝統双方になお養分を供給し続けているように見える。が、現代哲学との連関も含めて解釈に関するニーチェ後期の思索を検討するという、それ自体としては重要な課題も、本稿での試みとは別の課題に属している。又、同じく『生に対する歴史の利害』における解釈に関するニーチェの見解を取り出すこともここで目指されている事柄ではない。問題は、むしろこのテキストがどう読まれ得るかという問いの次元に設定されていると言ってよい。言い換えれば、この特定のテキストの解釈の可能性への反省を通じて一般的にテキスト解釈の持つ若干のアスペクトに光を当てること、この小論が目指しているのはこういった事柄に他ならない。ここでの試みを『生に対する歴史の利害』を素材としたテキスト解釈のケーススタディと規定した所以である。

＊

ここで取り上げようとするテキスト『生に対する歴史の利害』は、ある意味ではきわめて明解なテキストである。その論旨を簡単にまとめれば、凡そ次のように要約することができる。即ち、時代の文化的状況である歴史的知識の過剰、歴史的教養の絶対化は個人の成熟を妨げ、自己喪失と生の衰弱をもたらす。それは歴史病と呼び得るような病いなのであって、その病いが病いとして認識され、生が歴史に奉仕するのではなく、歴史が生に奉仕するという生と歴史との健全な関係が取り戻されねばならない。そのためには、歴史的知識の収集の自己目的化という当代の風潮の中で看過されている二つの力、つまり、忘却という非歴史的なものの力、また、芸術や宗教という永遠に目を向けさせる超歴史的なものの力が呼び戻されなければならない、と。

以上のような主張が全編を貫いており、しかもそれがかなり激しい調子で繰り返されているという意味では、この著作は極めてわかりやすい明解なテキストだと言ってよい。しかし、全体の論旨が明解であるにも関わらず、どこか腑に落ちないという印象を読者に引き起こすテキストであることもまた確かだと思われる。

そのような印象が喚起される最大の理由は、おそらくは、このテキストに奇妙な分裂が内在している点に求められる。このテキストでは、一方で、歴史的知識の過剰が激しく論難され非歴史的、乃至は、超歴史的な生と文化――古代ギリシャの悲劇的文化をそのようなものとニーチェは理解しているわけだが――に対する憧憬が語られながら、他方、過去による制約を免れ得ない歴史的な存在として人間が捉えられ、さらには歴史的知識の生への奉仕が

積極的に擁護されてもおり、各々非歴史的・超歴史的視点、また歴史的視点と呼びうるような二つの相容れぬ視点が共存しているのである。読む者に引き起こされる不透明な印象は、テキストに共存するこれら両視点への分裂に由来すると筆者には思われるのである。

この分裂は、はやくも第一節から現れている。そこでは、例えば、「だがこの状態、……一貫して非歴史的で反歴史的なこの状態……は不正行為のみならず、むしろあらゆる正当な行為の誕生の母体である。このような非歴史的な状態において到達すべきものをあらかじめ欲し追求をしているのでなければ、どんな芸術家も彼の絵に到達することはなく、どんな将軍も彼の勝利に到達することはなく、どんな民族もその自由に到達することはないだろう。[3]」と、知識による拘束を脱け出た非歴史的な境位があらゆる行為の基盤であるという意味で非歴史的なものの根源性が指摘されている。が、他方では「歴史的なものを我々が尊重することは西洋的な偏見に過ぎないかもしれない。しかし我々が少なくともこの偏見の内部で停止せずに前進しさえすれば！　歴史記述を生の目的のために営むこと、まさにこのことを常にますますよく学びさえすれば！[4]」と歴史的知識の生への奉仕を積極的に語る表現がある。

無論ニーチェは、両視点に属するこれら二つの表現群は、調停可能だという趣旨で、例えば、「非歴史的なものと歴史的なものは個人や民族や文化の健康にとって同じ様に必要である。[5]」と、或いは「歴史が生に奉仕する限りにおいてのみ、我々は歴史に奉仕したい。[6]」と書いてはいる。だが、はたして本当にそうか。この分裂は、これら二つの表現群を矛盾なく調停可能と捉えるのではなく、むしろ、調停不可能な分裂と捉えることによって意味を持ってくるような分裂ではないのか。このように定式化され得る問いが、ここで筆者が立ち止ろうとする問題次元を示す問いに他ならない。言い換えるならば、この分裂をどう解釈するかという問題を通してテキスト解釈の可能性を考えてみようというわけである。さしあたり、この著作が一般的にどのように解釈されてきたかを見てみることにしよう。

考察の手がかりとして『生に対する歴史の利害について』に関する多様な解釈の一つの極をまず想定してみたい。それは、テキストを特定の歴史的文化的な状況の産物つまり著者が置かれていた特定の状況に対する応答として捉え、さらには、著者とテキストを取り巻く歴史的な背景への解釈者の移入によって著者の心的な過程を追体験することでテキストの普遍妥当的な解釈に到達しようとするもので、言ってみれば、テキストの歴史的な解釈と呼び得る解釈である。

一般的には、このような解釈の理念は、解釈学の周知の命題、即ち「解釈学的な手続きの最終目標は、著者が自分自身を理解していた以上に良く著者を理解することである。[7]」という命題で表明されている。精神科学の方法論として解釈学を位置付けたディルタイは、例えば次のように書いている。

「普遍妥当的な解釈の可能性は、理解の本性から導かれ得る。理解において解釈者の個性と著者の個性とは比較し難い二つの事実として対立しているのではない。普遍的な人間本性の基礎の上に両者は形成されてきたのだし、この本性によって人間が

互いに語り合い理解しあうための共同性が可能になるのである。……（中略）……さて、しかし、解釈者がおのれ固有の生を試みに歴史的な状況のなかに移し入れるならば、そこから解釈者は束の間にせよ、ある心の事象を強調し強化し別の心の事象を薄れさせ、そのようにして他者の生を自己自身のうちに追形成するに至ることが出来る。[8]」

無論、ここでディルタイの解釈学そのものを主題的に論じようというのではない。解釈に関するディルタイの見解には時期による違いもあり、それは簡単な概括を許すものではない。が、ここで引用したディルタイの言葉には、著者の置かれていた歴史的な状況に解釈者が自己移入することによって著者の精神を追体験し理解できるという、解釈の心理主義的な捉え方が顕著に認められると言ってよいだろう。ここでのディルタイと共に解釈を著者の精神の追体験に帰着する操作と見なすならば、解釈者の関心は、無論書かれた言葉を媒介にしてではあるが、著者が当面していた社会的、文化的な状況、著者が念頭に置いていた読者、著者の意図など、テキストを取り巻く状況と著者の心的な過程に向かうと見ることができる。

その生と思想とが密接な関わりを持つ思想家――ニーチェはその一つの典型だが――のテキストを解釈する場合、このような方法が有効であること、また、時代状況に対する批判として構想された『反時代的考察』の第二論文であるこのテキストが、このような歴史的な解釈の方法に良く適合する対象であるということなどは言うまでもない。

著者ニーチェが当面していた状況とそれに対する著者の基本的な見解は、この著作の場合見紛う余地はない。このテキストの序において「この考察も反時代的である、なぜなら、私は、時代が正当に誇りとしているあるもの、即ち、時代の歴史的教養をここではっきりと時代の害悪、病気、欠乏として理解しようと試みるからであり、それどころか、我々すべてが身を焼きつくす歴史熱にかかっており、これにかかっていることを少なくとも認識すべきであると信ずるからである。[9]」とそれは既に与えられており、歴史的な解釈によれば、諸学の歴史主義化に顕著に見られる歴史的教養の自己目的化という当時の文化的な状況に対する警告の書としてこのテキストは描き出されると言ってよい。この節の冒頭で筆者がした要約もこのような方向のもので、このような解釈は、当時の歴史的な背景とこのテキストとの連関を明らかにすることによってさらに補強される。

正統的な古典文献学者として出発したニーチェが、古代に関する歴史的な知識の集積それ自体を目的とし始めた当時の古典文献学、つまり、科学としての性格を強めることによって古代ギリシャを生の模範と見る実践的な性格を喪失し始めた（とニーチェには見えた）当時の古典文献学から離反していく過程、また、古代ギリシャの悲劇的文化の再生を夢想してワーグナーのバイロイト劇場創設の運動に参加したというニーチェの生活史上の出来事、さらには、このテキストに二年あまり先行して出版された『悲劇の誕生』に対する古典文献学者の冷たい反応などの歴史的な背景のなかにこのテキストを置いてみるならば、生と認識との対立という『悲劇の誕生』が提示した枠組の延長上で歴史的知識の過剰に対する批判を主要なモチーフとしてこのテキストが構想された

ことに関して疑問の余地はない。それは、言い換えれば、この著作に於ける著者ニーチェの意図は、非歴史的・超歴史的視点に立って歴史的教養の絶対化という当代の風潮に対して反時代的な考察を展開することにあったと見て差し支えないということなのである。このことは、このテキストに関する最初期の草稿においても確認される。が、さらには、この書を読んだ歴史家ブルクハルトは当惑しトライチュケは激怒したと伝えられているように、このテキストが当時の読者に、現にそのような歴史認識誹謗の書として受け取られたという事実もあり、その点からもこの様な歴史的な解釈の妥当性は補強されると見ることができる。

以上のように見る限り、このテキストに関する歴史的な解釈はその概要において妥当な解釈であるように見える。無論、このテキストが置かれている当時の歴史的状況や著者ニーチェの生活史上の出来事について新たな発掘がなされれば、この解釈は部分的な変更を余儀なくされるかも知れない。だが、それは新たな歴史的事実の発見によるより〈正しい〉解釈への接近の過程であって、将来における変更の可能性を宿しているからといって歴史的な解釈自身が方法的に不適切であるということにはならない。というより、むしろ、このテキストにまつわる歴史的知識の増大により、普遍妥当的な解釈へと漸進的に接近しうるはずだという想定が、ここまでで類型化してきた歴史的な解釈の基本的な想定であって、新たな歴史的知見が加わることによる解釈の変更の可能性はこの基本的想定に沿う事柄なのである。

普遍妥当的な解釈が可能であるかのような想定についてはひとまず措くとすれば、テキストを取り巻く状況に関する歴史的知識を背景として著者の意図に焦点を当てつつテキストを解釈しようとする歴史的な解釈が、解釈の一つの在り方として可能であることを筆者は疑わない。だが、同様に疑い得ないのは、歴史的な解釈にはそれ固有の限界があるということ、又それのみがテキストにアプローチする唯一の方法ではないということ、こういった事柄である。テキストの書かれた時点における歴史的状況とそこにおける著者の意図に解釈者の関心を集中させるというそれ固有のフィルターを通してテキストを解読することによって、歴史的な解釈の理念に忠実な解釈者に対してはテキストの中にありながら覆い隠されてしまうものが少なからずあると思われるのである。

『生に対する歴史の利害』の場合で言えば、歴史的な解釈によって覆い隠されてしまうと筆者が考えているものとは、先に指摘したこのテキストに内在する分裂に他ならない。著者の真意、乃至は、意図をテキストに関する妥当な解釈の最終審級とする歴史的な解釈の方法によれば、歴史的知識の生に対する有用性を主張する歴史的視点に拠る表現群は、既に見たようにこのテキストにおいて非本質的なものと見なされざるを得ないのである。仮に歴史的視点と非歴史的・超歴史的視点との共存とそれらの間の乖離に気付かれたとしても、歴史的な解釈の方法に従う限り前者は著者ニーチェの基本的モチーフには沿わないものとして解釈の視野から排除されざるを得ないと言ってよい。

無論、このテキストに関する歴史的な解釈がこのような結論を引き出すのは、それはそれとして正しいと見ることはできる。それは、解釈の一つの在り方として歴史的な解釈が可能であることを認めたところで既に含意されていた事柄である。だが、仮にこ

のような解釈に立ち止まるとすれば、テキストを読むという行為が持つ可能性を大幅に削減してしまう結果になるように筆者には思われる。テキストが書かれた時点に於ける著者の意図にではなく、書かれた言葉であるテキストそのものに忠実に、ここで問題にしている二つの表現群の共存を調停し難い分裂と捉えることによって、このテキストの別の解釈の可能性が開けてくるのではないかと思われるのである。両視点に属す言表を、もう一度引用してみよう。一方では、古代ギリシャの悲劇的文化への憧れが次のように語られている。

「いつの日にか、アレキサンドリア的・ローマ的文化の精神を我々のうちに――また我々の世界史を通して――非常に豊饒かつ雄大に再生産したと自ら賞賛出来るかもしれない。その時その最も高貴な報酬として我々に許されるのは、このアレキサンドリア的世界の背後に遡り、それを越えるべく努力するという課題、偉大なものと自然的なものと人間的なものを持つ古代ギリシャの原世界のうちに大胆な眼差で我々の模範を求めるという一層力強い課題を立てるということである。我々は、しかし、又そこに、本質的に非歴史的教養と、非歴史的であるにも関わらず、或いはむしろ非歴史的であるが故に名伏し難く豊かにして生に満ちた教養の現実を見いだすのである。[10]」

他方、歴史的教養に関する批判的歴史の必要性を説いて次のように言われる。

「けだし、歴史的教養の根源――そして〈近代〉や〈近代的意識〉の精神に対してこの教養が内面的に全く根本的な矛盾を犯していることの根源――この根源がそれ自体再び歴史的に認識されなくてはならず、歴史は歴史自体の問題を解決しなくてはならず、知識はその刺をそれ自体に向けなくてはならない。この三重のなくてはならぬは、いやしくも、〈近代〉のうちに現実になにか新しいもの、力強いもの、生を約束するもの、根源的なものがあるならば、この〈近代〉の精神の命法である。[11]」

後者は、現在を制約する過去を認識の光で照らし出すことによって破壊しようとする試みへの呼掛けであって、生への奉仕という一点を除けば、ニーチェの批判の対象となった歴史主義と見紛うほどの歴史偏重の要求だと言ってよい。これほど明確に語られてはいるものの、既に述べたように、この著作における著者のモチーフというフィルターを通してこのテキストに接近する歴史的な解釈によれば、このような歴史偏重の要求はこのテキストにおける夾雑物に過ぎないということにならざるを得ない。しかし、そのフィルターを外してみるならば――ということは、著者の意図や、テキストの置かれていた状況を差し当り度外視するという別のフィルターを付けるということに他ならないが――その場合には、歴史的教養に関する批判的歴史の必要生を語るこの言葉は、むしろ、このテキストが開く意味の世界の基本構造をなす不可欠の構成要素として立ち現れると思われる。このテキストを虚心に読むならば、このテキスト自体が歴史的教養の批判的歴史としての一面を持つと言えるのであって、この側面と、もう一方の極である、非歴史的な教養に導かれた豊かな生を志向する側面との間に生まれる緊張関係によってこのテキストの意味の世界は成り立っていると見ることができるのである。[12]

永遠の創造と破壊を洞察する悲劇的神話によって視界を限定さ

れた古代ギリシャの非歴史的・超歴史的な生と文化の在りようを直接開示したものが『悲劇の誕生』であったとすれば、ここで取り上げたテキストは、そのような文化と生への憧憬が、別の認識、即ち、基本的に歴史的な存在として過去からの決定的な制約を被らざるを得ず、それ故に過去に対する、言い換えれば歴史に対する抵抗の為に批判的歴史を必要とするとの認識と併存し、葛藤を起こし始める世界を指し示していると見ることができる。このテキストに内在する分裂はその徴表であると筆者には思われるのである。[13]

とはいえ、無論、ここまで述べてきたところは筆者なりのテキストの分析に基づいて行った一つの解釈に過ぎない。また、この解釈が妥当性を持つと筆者自身が考えていることは言うまでもないが、実際にこの解釈がどの程度の妥当性を持つかということも、この小論での観点に照らしてみるならば、あまり重要な問題ではない。ここで重要なのは、歴史的な解釈固有のフィルターを外した場合、つまり、テキストそれ自体を分析する視点に立った場合、別の解釈の可能性が開かれるということを確認することであって、問題はむしろ以上の事例からテキスト解釈に関して何が言えるか、ということだと言ってよい。簡単に暫定的な結論をまとめておこう。

先ず第一に、言えることは、テキストから読みとられるべきものは、ある特定の歴史的状況において著者に生起した精神の在りようでは最早なく、テキストそれ自体が開く意味の世界だということである。これは虚構の文学作品や哲学的なテキストの場合、特に顕著だが、ここで取り上げたテキストのようにテキストが書かれた時点における歴史的状況と密接に結び付いたテキストに関しても当てはまると思われる。これは、事柄としてみれば、書かれた言葉であるテキストの特性から帰結すると見ることが出来る。リクールは、書く〜読むという関係は、話す〜聞くという対話における関係の延長上で捉えることはできず、書かれ定着されることによって、テキストは、著者の意図やその時点における歴史的状況から相対的に独立した世界を開くという意味で次のように書いている。

「話し手の主観的な意図と話される言葉の意味とは重なり合うので、話し手が言おうとしていることを理解することと話された言葉が意味することを理解することは同じことなのである。……（中略）……しかし、書かれた言葉とともに、著者の意図とテキストの意味とが重なり合わなくなる。テキストの文字通りの意味と著者の心理的な意図との分離は、記載の概念に決定的な重要性を、つまり先行する話された言葉を単に固定化するという以上の決定的な重要性を付与する。記載はテキストの意味論的な自立性と同義になるが、テキストの意味論的な自立性は、著者の意図とテキストの文字通りの意味との分離から結果として生じてくるものなのである。[14]」

リクールの言う「テキストの意味論的自立性」という概念によって指示されているテキストの特性に着目するならば、テキストが書かれた時点においてそれを取り巻く状況を度外視してテキストそれ自体を分析する方法は、テキストの在りように即した方法として正当化されると見てよい。テキストは、書かれた時点で著者が言おうとしたこと以上の意味を持ち得るのであって、著者

の意図を解釈の最終審級とする必然性はない、つまり歴史的な解釈のみを〈正しい〉解釈の範型とする必然性はないということになると言うことが出来るのである。

また、以上のことから第二に言えることは、テキストの開く意味の世界は、解釈者に直接与えられているのではなく、解釈者が構築すべきものであるが故に、解釈は、差し当り、多様であり得るということである。無論、ここで直ちに解釈の多様性と普遍妥当的な解釈の可能性とがどう連関するのかという難問が生じるが、ここではその問題についての判断は留保し、多様な解釈の積極的な意義を確認するにとどめておきたい。「意味論的自立性」という概念が示唆するように、テキストは、それが置かれていた最初の状況から切り離されることで様々に読まれ得る可能性が生じてくるのであり、新たな読みは新たな意味の産出と見なすことが出来る。無論、これは単なる誤読を容認することと同義ではなく、あくまでもテキストに即してテキストに書かれた言葉を手掛かりとしての新たな意味の産出である。ここで取り上げたテキストの分析に即して言えば、歴史的な解釈によっては覆い隠されてしまう非歴史的・超歴史的視点と歴史的視点との緊張関係をニーチェのテキストから読み取ることは、その緊張関係を事柄として理解する意味の世界を開くことだと言ってよい。この意味の世界はテキストのうちに言わば隠されてはいるものの、読者の側における解釈というすぐれて創造的な行為を介してしか立ち現われては来ないのである。この事例からも窺えるように、テキストの持つ潜在的な可能性を引き出すことに解釈の積極的な意義があると思われるのだが、新たな可能性を引き出すことが新たな意味の産出ということに他ならないと言うことができるだろう。

また第三には、あるテキストが、著者の置かれていた状況とは異なった状況の読者にも読まれ得るのは、テキストの開く意味の世界を何らかの形で読者が共有できるからだという点を指摘できる。先のテキストの解釈に戻して言えば、それは非歴史的な生・超歴史的な生への憧憬と、歴史的な制約の自覚との緊張関係が生み出す世界と交渉しうるだけの意味の世界が解釈者の側にあるということとかと思われる。あるいは、より正確には、テキストを読むという出来事を通して、テキストと交渉しうるだけの意味の世界が解釈者に開けてくると言った方がよいかも知れない。もしそう考えてよいとすれば、このことは、解釈は何を目標とするかという問題とも密接に結び付いていると言える。解釈者は、言ってみればテキストに触発されて、テキストの解釈の過程で意味の世界を成長させて行くのであり、それを通じて自己を変貌させていくのである。例えば、歴史的視点と非歴史的・超歴史的視点との緊張関係をニーチェのテキストから読み取ることによって、解釈者はそのような緊張関係を自覚的に生きる可能性を手にするとも言えよう。歴史的な解釈やテキストの分析すべてを含んだ一連の過程が解釈だとしても、解釈は、最終的には、それら以上のことであって、テキストが開く意味の世界との交渉の過程で解釈者自身が変貌していくことまでを含むと思われるのである。

＊

以上『生に対する歴史の利害』を素材としたテキスト解釈のケーススタディから差し当り取り出せる結論である。それもあくまでも解釈に関する筆者の暫定的な覚書として問題点を提示する

に過ぎないものであり、なお検討する余地が多く残されていることは言うまでもない。例えば、第三点として、ニーチェのテキストを我々が読めるのもテキストが開く意味の世界を何らかの形で共有しているからだということを指摘したが、翻って考えてみるならば、意味の世界を共有し得るということ自体の社会的文化的条件をもう一度歴史的な方法で説明するという課題がそこには示唆されていると言える。無論、これは、最初に指摘した歴史的な解釈、歴史的な説明と異なった次元のものではあるが、テキストを読むという行為自体が一定の歴史的な条件のもとで特定の制度の中で行われる営みである以上、それを無視して抽象的にテキストを読むという問題を解くわけにはいかないと思われる。が、このような解釈の可能性の条件に関わる問題も含めて、ここで覚書として提示した事柄を再度より立ち入って論じる他日を期し、ここでは以上問題点の提示をもって筆を置くことにしたい。

注

(1) F. Nietzsche, *Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe*, Bd. 12. 7 〔60〕, de Gruyter〔白水社版ニーチェ全集第九巻（第Ⅱ期）所収〕

(2) ibid. 1 〔120〕〔同上所収〕

(3) F. Nietzsche, *Unzeitgemässe Betrachtungen*, Zweites Stück: Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben 1（番号は節番号）〔『反時代的考察』第二論文『生に対する歴史の利害』1〕

(4) ibid.〔同上〕

(5) ibid.〔同上〕

(6) ibid. Vorwort〔同上、緒言〕

(7) W. Dilthey, *Die Entstehung der Hermeneutik*, S. 331, Gesammelte Schriften Bd. 5〔『解釈学の成立』、以文社 p. 40〕

(8) ibid. S. 329, 330.〔同上 p. 37, 38〕

(9) F. Nietzsche 前掲書 Vorwort

(10) F. Nietzsche 前掲書∞

(11) ibid.

(12) このテキストの構造に即して簡単に論理の筋をたどると次のようになる。このテキストで、生は、歴史的なもの、非歴史的なもの、超歴史的なものの三者の均衡の上に成り立つと考えられていて、異質なものを同化する力である造形力の処理し得る範囲内であれば歴史的なものは、むしろ生と文化にとって有用だとされている。それ故、批判的歴史の必要性も強調され得るわけで、その限り形式的には矛盾はないと言ってよい。ただ、このように量のカテゴリーによって生を捉えると、三者の均衡のあり方において多様な生を承認する結果となるが、このことと、古代ギリシャの生を模範とすることが緊張関係に立つことになるのである。

(13) 歴史的な解釈の場合のようにテキストの成立時に着目するのではなく、むしろニーチェ哲学が完結した後に生まれた読者の特権を生かしてニーチェが書き残したテキスト全体をコンテクストとして『生に対する歴史の利害』を捉えてみるならば、批判的歴史の意義を強調する歴史的視点は、このテキ

ストの不可欠の構成契機であることがより明確になろう。この著作に続く『人間的、あまりに人間的』では、歴史的な感覚をもって哲学することの重要性が説かれ、実際にニーチェ自身によるその実践として伝統批判が開始される。また、その伝統批判は後期に至って系譜学へと結実していくのであって、ここで指摘した分裂は、後期における永遠回帰思想と系譜学の間にある分裂と同型のものと見ることが出来る。『生に対する歴史の利害』に関するこういった方向での解釈を、筆者は拙論『ニーチェと歴史』(倫理学年報第三十九集、日本倫理学会編)で提示したことがある。参照願えれば幸いである。

(14) P. Ricoeur, *Interpretation theory, discourse and the surplus of meaning*, p. 29, 30, Texas Christian University Press, 1976

参考文献(邦訳で読めるものに限定して、注で触れなかった参考文献を挙げておきたい。)

1 『解釈学の根本問題』(ペゲラー編、晃洋書房) Herausgeber Otto Pöggeler, *Hermeneutische Philosophie*, Nymphenburger Verlagshandlung Gmbh, 1972

2 『解釈の革新』(ポール・リクール、白水社) Expliquer et comprendre などリクールの諸論文を久米博他が編集したもの

3 『テクストと解釈』(デリダ、ガダマー他、産業図書) Herausgeber Philippe Forget, *Text und Interpretation*, Wilhelm Fink Verlag, 1984

4 『科学・解釈学・実践』(リチャード・J・バーンスタイン、岩波書店) Richard J. Bernstein, *Beyond Objectivism and Relativism: Science, Hermeneutics, and Praxis*, The University of Pennsylvania, 1983

5 『哲学の脱構築——プラグマティズムの帰結』(リチャード・ローティ、御茶の水書房) Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism*, The University of Minnesota, 1982

(ゆあさ ひろし・西洋思想史)